Osaka Shoin Women's University Repository

『源氏物語』における「ゆかし」の考察（五）

北村英子

本稿は、前稿「『源氏物語』における「ゆかし」の考察（四）」（「樟蔭国文学」第二十七号）に引続き、「柏木」の巻から「ゆかし」という語彙の持つ、語義・欲求・好奇心・対象・用法等について、逐次用語例を検討する事によって考察を巡らしていく。

「柏木」の巻では、「ゆかし」という語は一例のみ見当たる。その用語例を示す。

○山の帝は、めづらしき御事たひらかなりと聞こしめして、あはれにゆかしう思ほすに、かく悩みたまふよしのみあれば、いかにものしたまふべきにかと、御行ひも乱れて思しけり。

この用語例中には、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われ、「思ほす」という心の動きを表わす語を下接させ、思う事の内容を「ゆかし」という語で示している。

語義は「会いたく」と意味付けるのが適切で、「山の帝（朱雀院）は珍しい御事（女三宮の出産の事）が、平安におすみになったとお聞きあそばして、しみじみお会いになりたくお思いなさるが」と現代語訳出来る。

これは、朱雀院が衰弱している女三宮を気遣う心情で、会ってみたいそして話してみたいという意識が働いている。この意識を喚起する要因は、女三宮が平安に出産をおすませになった事を聞いてから、視覚的欲求に向って心が動いている。即ち、聴覚から視覚へと感覚が移入されている。又、これは男性が女性にむけた好奇心である。

次の「横笛」の巻には、「ゆかし」という語は四例見当たる。それ等を検討していく。

○御返りつつましげに書きたまひて、御使には青鈍の綾一襲賜ふ。書きかへたまへりける紙の御几帳の側よりほの見ゆるをとりて見たまへば、御手はいとはかなげにて、

女三の宮 うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思

Osaka Shoin Women's University Repository

ひこそ入れ

一番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義を考察すると、心情面から捉えて、「心が惹かれて」・「関心を寄せて」と意味付けられようが、文意に即して、もう一歩進めて考えを深めてみると、対象に「心が惹かれて」「(そのところへ)行きたい」という意識が起こり、そして、次に「(そのところへ)住みたい」という意識に移行すると思われる。因に、次の注釈書の、この問題の語の解釈を見てみると、『日本古典文学全集』では、「行きたくて」と解されており、『新潮日本古典集成』・『源氏物語評釈』では、「住みたくて」と第二義的な意味に訳されている。

ここで、この「ゆかし」という語が詠み込まれている短歌の下の句である、「そむく山路に思ひこそ入れ」の解釈を考えてみると、「父上が出家していらっしゃる山寺に、私も心を深く寄せております」と現代語訳出来よう。そのように考えると、上の句に詠み込まれている「ゆかし」の語義は、「ゆかし」本来の意義より広義な、第二義的な意味である「住みたく」と意味付けた方が最も適切であると思われる。そして、「つらい世の中以外のところに住みたくて、父上が出家していらっしゃる山寺に、私も心を深く寄せております」と現代語訳出来る。

この短歌は、女三の宮が朱雀院に返事として書いたものである。女三の宮の心中は、「つらいこの世の住み処」から脱却したく、父上がいらっしゃる山寺に「心が惹かれ」、そして「行きたく思い」、そして「住みたく思う」という心情の変化が感取出来る。したがって、女三の宮自身の欲求しているものは、「苦痛な世」から「安住な世」へと心が向けられ、心の傷をいやしたいため、山の中に行って住みたい思いを指している。

次の用語例の検討に移る。

○大将の君は、かのいまはのとぢめにとどめし一言(ひとこと)を心ひとつに思ひ出でつつ、いかなりし事ぞとは、いと聞こえまほしう、御気色もゆかしきを、ほの心えて思ひ寄らるる事もあれば、なかなかうち出でて聞こえんもかたはらいたくて、いかならむついでに、この事のくはしきありさまも明(あき)らめ、また、かの人の思ひ入りたりしさまをも聞こしめさせむ、と思ひわたりたまふ。

二番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

語義は、「御気色」とあるところから考察して、視覚意識が働いているものと思われ、「見たい」と意味付けるのが適切である。そして、「夕霧は、柏木が臨終に言い残した一言を(源氏へのとりなしを頼んだ事)。心ひとつに思い出しながら、どういう事情だったのかと、源氏にとてもお尋ねしたく、その際の顔色をも見たいのだが、夕霧は事情をうすうす察して思いあたる事もあったので、かえって口に出して申し上げるのもみっともないので、……。」と現代語訳出来る。

この場合の「ゆかし」の志向対象は源氏の顔色である。即ち、夕霧は柏木が言い残した遺言を常に不審に思い、どういう事情だったのか源氏にお尋ねしたく、その時の源氏の顔色や態度で反応を見て知りたいと思っている。したがって、この用語例中の「ゆかし」は、

Osaka Shoin Women's University Repository

見たい、そして探って知りたいという夕霧の意識を察知する事が出来る。視覚的欲求が涌き起るその心裡には、探って知りたいという夕霧が源氏に向けた不安を伴った好奇心が察知出来る。

次の用語例を検討していく。

○なま目とまる心も添ひて見ればにや、まなこゐなど、これはいますこし強う才あるさままさりたれど、眼尻のとぢめをかしうかをれるけしきなどいとよくおぼえたまへり。口つきの、ことさらにはなやかなるさましてうち笑みたるなど、わが目のうちつけなるにやあらむ、大殿は必ず思し寄すらんと、いよいよ御気色ゆかし。

三番目の用語例は、「ゆかし」と形容詞の終止形で表われる。

語義は文意に即して考察すると、「知りたい」と意味付けるのが最も適切である。そして、「なんとなくそう見てしまうという気持も加わるせいであろうか、目つきなど、この子（薫）のもう少し力強く才走った様子は柏木以上だけれど、目じりの切れが美しく輝いている様子などは、（柏木に）じつによく似ていらっしゃる。口もとが特別はなやかな様子をして、にっこり笑っているところなど（柏木にそっくりで）、自分がいきなりそう見たせいなのだろうか、源氏はきっとお気付きでいらっしゃるのだろうと、以前よりもますます御様子（心中）が知りたい。」と現代語訳出来る。

これは二番目の用語例から三番目の用語例へと叙述が続き、夕霧は、源氏の胸中にかかって探りを入れ、柏木死去の由来を確かに知りたいという意識を持ち続けてきた、そして、三番目の用語例において、薫の容貌が柏木とよく似ている事から、薫は柏木の子供であることをほぼつかんだ。そして、ますます源氏の心中を知りたいと思うのである。

ここで再び二番目の用語例を見ると、「御気色もゆかしきを」とあり、三番目の用語例中においても、「御気色ゆかし」とあり、どちらも源氏の「御気色」を指し、同じような用語を用いているのは注意を引く。三番目の用語例の説明をもう少し加えると、夕霧は源氏の表情や態度を見たり話したりしながら、源氏の心中を探って知りたいという欲求が高まっている。即ち、この「ゆかし」は「いよいよ」という語を伴っているところから、「ゆかし」の欲求がより強く昂揚する。そして、夕霧の疑惑や不安の心情がうすれ、確信に満ちてくる。その感覚は複合感覚で「見たり」「聞いたり」して「知りたい」という意識が働いている。

次の用語例を見てみる。

○源氏「かの想夫恋の心ばへは、げに、いにしへの例にもひき出でつべかりけるをりながら、女は、なほ人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ、と思ひ知らるる事どもこそ多かれ。過ぎにし方の心ざしを忘れず、かく長き用意を人に知られぬ、とならば、同じうは心清くて、とかくかかづらひゆかしげなき乱れなからむや、誰がためも心にくくめやすかるべきことならむ、となん思ふ」とのたまへば、

四番目の用語例は、「ゆかしげなき」と形容詞の連体形で表われる。

語義は、この場合、「見たい」・「聞きたい」・「知りたい」等の本

Osaka Shoin Women's University Repository

来の意味からより広義な意味を考察しないと文意上そぐわない。そこで、座右にある各注釈書の、「ゆかしげなき乱れ」の解釈の個所を調べてみると、

○「……同じことなら、きれいなおつきあいをして、何かとやっかいなことで苦労したり、おもしろくもないごたごたの起こらないのが……」（『日本古典文学全集　源氏物語』―小学館）

○「……同じ事なら綺麗な気持で、何かとお世話をして、感心しない不行儀はないのが、……」（『源氏物語評釈』―角川書店）

○「……同じことならきれいな気持で、何かとかかわり合って、世間によくある間違いなどしないほうが、……」（『新潮日本古典集成　源氏物語』―新潮社）

○「……厚意は、同じ事なら、（懸想心などはなくて）潔白な心で、何事にもとやかく、かかりあい（世話をやき）、然し決して、奥ゆかしげの（感心し）ない浮気（不行儀）のないようなのが、（夕霧と落葉宮の）誰のためにも、奥ゆかしく、人目にも当然、醜くないはずの事であろうか」（『日本古典文学大系　源氏物語』頭注　―岩波書店）

等、様様に解されている。右のうち、「ゆかし」本来の語義から考察すれば、「奥ゆかしげのない」という解釈がより妥当のように思えるが、その周辺に同義の語である、「心にくし」（奥ゆかし）があるため、問題にしている語、「ゆかしげなき」の解釈は、「奥ゆかしげのない」と解しない方がよいように思える。では、右のうち「感心しない不行儀」と解釈するのが、文意上から考えてより自然に訳が付くように思え首肯出来るが、ここで、「ゆかし」本来の意義にもどして、考察を加えてみると、「聞きたくないような間違い」と意味付けて、「……同じことならきれいな気持ちで、何かとかかわり合って、聞きたくないような間違いなどないのが……」と現代語訳出来よう。ここに一考を示しておく。

さて、源氏の言葉の中に表われる「ゆかしげなき乱れ」とは、源氏は女三の宮の姉宮である落葉の宮に、わが子夕霧までが関係して、父院（朱雀院）に迷惑のおよぶのを恐れている。したがって、源氏の心配した心情が伴っている。

以上、「横笛」の巻における四例の用語例を検討してきたが、一番目の用語例においては、女三の宮の欲求の心裡には煩悶が感取され、二番目・三番目は夕霧の心裡に探知心が感取され、四番目は源氏の心裡に心配した心が感取され、四例とも不安定な心が伴っている事がわかる。

次の「鈴虫」の巻を調査したが、「ゆかし」の用語例は皆無であった。

次の巻は「夕霧」の巻である。この巻においては、「ゆかし」の語は四例見当たる。それ等を検討していく。

○八月中の十日ばかりなれば、野辺（のべ）のけしきもをかしきころなるに、山里のありさまのいとゆかしければ、夕霧「なにがし律師（りし）

Osaka Shoin Women's University Repository

のめづらしう下りたなるに、切に語らふべきことあり。御息所のわづらひたまふなるもとぶらひがてら、参うでん」と、おほかたにぞ聞こえごちて出でたまふ。御前ことごとしからで、親しきかぎり五六人ばかり狩衣にてさぶらふ。ことに深き道ならねど、松が崎の小山の色なども、さる巌ならねど秋のけしきづきて、都に二なくと尽くしたる家ゐには、なほあはれも興もまさりてぞ見ゆるや。

一番目の用語例は、「ゆかしけれ」と形容詞の已然形で表われる。語義は、様様考えられるが、まず座右の諸注釈書を見てみると、

○「八月の二十日ごろなので、野辺の秋景色も美しい時節であるし、山里の風情にもひどく心ひかれるので、……」(『日本古典文学全集　源氏物語』—小学館)

○「八月二十日の頃なので、野原の景色も美しい時節だし、山里の様子がとても気になるので、……」(『源氏物語評釈』—角川書店)

○「……、御息所の山荘の様子がとても気にかかるので、……」(『新潮日本古典集成　源氏物語』—新潮社)

と、心情面で捉えて訳されているが、「ゆかし」本来の意義で考えてみると、「見たい気がする」と感覚的意識で捉えて訳する事が出来、「八月二十日頃なので、野辺の景色も美しい時節であるし、山里の様子が大層見たい気がするので、夕霧『何何律師が珍しく山から下りたそうだが、是非とも相談しなければならない事がある。御息所が患っていらっしゃるそうだから、それもお見舞がてら、お伺いしたい』と、普通の訪問のように申し訳けしてお出かけになる。……」と、現代語訳出来る。これは八月二十日頃、夕霧が御息所の病気を見舞うため、小野を訪れる場面である。しかし、夕霧の真意は落葉の宮に会う事が目的でありながら、律師や御息所に会う事が目的のように装っている。野原の秋景色も美しい時節に、夕霧はますます出かけたい気持が高ぶる。『日本古典文学全集　源氏物語』等にも指摘されているが、夕霧の訪問にはこのように常に自然の景色と共に描写されている。

さて、このように考察してくると、本用語例中の「ゆかしけれ」は、夕霧の美しい秋景色に対する美感覚で、視覚的好奇心が募っているものと思われる。その心裡には、以前から山荘を訪れたいと気になっていたが、やっと出かける機会に恵まれ、うきうきとした気分で、心惹かれる小野へ向い、落葉の宮に会いたいという視覚的欲求が働いているものと思われる。

では、次の用語例の検討に移る。

○人々は、「何かは、ほのかに聞きたまひて、事しもあり顔に、とかく思し乱れむ。まだきに心苦し」など言ひあはせて、いかならむと思ふどち、この御消息のゆかしきを、ひきも開けさせたまはねば心もとなくて、女房「なほ、むげに聞こえさせたまはざらむも、おぼつかなく若々しきやうにぞはべらむ」など聞こえてひろげたれば、」

Osaka Shoin Women's University Repository

二番目の用語例は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

語義は、「読みたい」と意味付けるのが相応しい。そして、「女房たちは、『母御息所が、なんの、ちょっとお聞きになって、いかにも事あり顔に、何かと御心配なさるでしょうか。取越し苦労はお気の毒な』など話し合って、このお二人がどうおなりになるのだろうと思っている女房達は、この夕霧のお手紙の中身を読みたいのに、宮がお開かせにもならないので、女房達はじれったくて、女房『やはり、全然御返事申し上げなさらないのも、どうしたのかと思われ、子供っぽいようでございましょう』などと申し上げて手紙を広げたので、」と現代語訳出来る。これは、女房達が、夕霧と落葉の宮の間を気にしている。なぜならば、宮の身の上が、直接自分達の身の上にかかってくるから心配でたまらないのである。したがって、手紙に何が書いてあるのか、読んで知りたいという視覚好奇心が強く働いている。又、この感覚には、心配や不安な心情が伴っている。

次の用語例を検討する。

○この人々もむせかへるさまなれば、夕霧「聞こえやるべき方もなきを。いますこしみづからも思ひのどめ、またしづまりたまひなむに参り来む。いかにしてかくにはかにと、その御ありさまなむゆかしき」とのたまへば、まほにはあらねど、かの思ほし嘆きしありさまを、片はしづつ聞こえて、

三番目の用語例も、「ゆかしき」と形容詞の連体形で、夕霧の言葉の末尾に表われる。

語義は、感覚面で捉えて「聞きたい」と意味付けるのが最も相応しい。そして、「この女房達も涙にむせ返るような様子なので、夕霧『申し上げようもないが、もう少し私自身も気持を落ち着け、また宮様もお心の静まられたころにお伺い申しあげましょう。どうしてこんなに急な事になったのかと、その時のご様子が聞きたいのだが』とおっしゃると、はっきりとではないが、御息所がお嘆きになっていらっしゃった様子を、少しずつ申し上げて、」と現代語訳出来る。即ち、夕霧は、御息所の急逝のご様子を聞いて知りたいという、聴覚的欲求が募る。その好奇の心は、過去に起った悲しみに向けられ、病気急変の理由は何であったのかを、知りたい気持ちが心中潜んでいる。したがって、この用語例中の「ゆかし」は、心の静まらない不安定な心情が、察知出来る。

次の用語例の検討に移る。

○大将の君参りたまへるついでありて、思たまへらむ気色もゆかしければ、源氏「御息所の忌はてぬらんな。昨日今日と思ふほどに、三年（三十年とする本文多数）よりあなたの事になる世にこそあれ。あはれにあぢきなしや。夕の露かかるほどのむさぼりよ。いかでこの髪剃りて、よろづ背き棄てんと思ふを、さものどやかなるやうにても過ぐすかな。いと悪きわざなりや」とのたまふ。

四番目の用語例は、「ゆかしけれ」と形容詞の已然形で表われる。

語義は、「知りたい」と意味付けるのが相応しい。そして、「大将の君が参上なさる機会があって、お思いになっていらっしゃる様子も知りたいので、源氏『御息所の忌は終ったのでしょうね。昨日今日と思っているうちに三年（三十年の本文多数あり）より昔の事に

Osaka Shoin Women's University Repository

なる世の中なのだ。はかなく味気ないものですねえ。夕方の露が草葉にかかっているほどのはかない命をむさぼっているのだ。なんとかしてこの髪を剃(そ)って、よろづの事を厭(いと)い捨てたいと思うのだが、なんとのんびりした様子で日を送っていることだ。非常にみっともないことですよ』とおっしゃる。」と現代語訳出来る。これは、夕霧が六条院へ参上なさる機会があり、その折に、夕霧が落葉の宮をどう思っていらっしゃるのか、夕霧の落葉の宮の執心の程を源氏は気にし、夕霧と語ったり、そぶりや態度を見て探りたいそして知りたいという意識を示している。源氏は、夕霧と落葉の宮の女性関係に強く気持ちが惹かれ、知覚を生じる。したがって、本用語例中の「ゆかし」は、源氏の複合感覚を示し、その心裡には、不満や不安定な不快感情が潜んでいる事が察知出来る。

以上、「夕霧」の巻の四例の用語例を検討してきたが、すべて形容詞で、一番目と四番目が已然形で、二番目と三番目が連体形で、四例中已然形と連体形が各々二例ずつ同数で表われる。

一番目は珍らしく、夕霧が美しい秋景色に好奇心を募らせ、「見たい」という視覚的欲求を働かせている。夕霧の美感覚の心裡には、心惹かれる小野へ向いたい、そして落葉の宮に会いたいと希求するうきうきとした快い心情が察知出来る。

二番目は、女房達が夕霧の手紙の内容を気にして、「読みたい」という視覚的欲求を募らせている。なぜなら、主人（宮）の身の上にかかわる事は、女房達の生活にも影響してくるから心配しているのである。したがって、視覚意識の心裡には、不安な心的状態が伴っている。

三番目は、夕霧が御息所の急変の理由を「知りたい」という欲求を募らせている。それは、「聞いて知りたい」という聴覚的意識が働いている。その心裡には夕霧の満たされない不安定な心情が察知出来る。

四番目は、源氏が夕霧の落葉の宮の執心の程を気にしている。それを知るには、夕霧と面会して、話しを聞き、その様子を見て知りたいという欲求が涌き起こる。したがって、本用語例中の「ゆかし」は、視覚と聴覚の共感覚が認められ、その心裡には、不快感や不安定な心情が伴っている。

さて、このように四例の用語例を整理してみると、視覚的欲求が働くもの二例（男性一例・女性達一例）・聴覚的欲求が働くもの一例（男性）・視覚と聴覚の共感覚的欲求が働くもの一例（男性）で、総じて、「夕霧」の巻においては、「ゆかし」の感覚的欲求は、男性が主体者になる場合が多い。又、その心裡に働く心情は、美的心情を伴うものが一例で、後の三例はすべて、心的状態の好ましくない心情で、不満や不安定や不快感を伴う場合が多い。

次の巻の検討に移る。「御法」の巻では、「ゆかし」の用語例は一例のみである。

○宮たちを見たてまつりたまうても、紫の上「おのおのの御行く末をゆかしく思ひきこえけるこそ、かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや」とて涙ぐみたまへる、御顔のにほひ、いみじうをかしげなり。などかうのみ思したらん、と思す

Osaka Shoin Women's University Repository

に、中宮うち泣きたまひぬ。

この用語例中には、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われ、「思ひ」という心の動きを表わす語に接続させ、思う事の内容を「ゆかし」という語で示している。

紫の上の言葉の中に表われている「ゆかしく」の語義を考察すると、「御行く末」という語から勘案して、「見届けたい」と意味付けるのが最も相応しい。そして、「紫の上は、若宮方（明石の中宮腹の皇子・皇女）をごらんになるにつけても、紫の上『お一人お一人の御行く末を見届けたいものと思い申し上げていたのは、こんなはかない身を惜しむ心がどこかにまじっているのでございましょう。』とおっしゃって涙ぐんでいらっしゃる。そのお顔の風情は、何ともいえない程のお美しさである。どうしてこう心細いことばかりお考えになられるのであろうかとお思いになって、中宮はとうとうお泣き出しになった。」と現代語訳出来る。これは、紫の上は、自身の死の予感が日々に強くなってくると、明石の中宮腹の皇子皇女達まで気になり、その成長ぶりを見届けたいと思うが、ひどく衰弱してきた今はもう、見届けられないだろうと悲しく最期の思いにふける。という描写中に「ゆかし」が使用され、視覚的欲求が募っている。その欲求は、紫の上にとって、実現不可能な希求になると思いつつも、心の底に強く潜む。死に臨んだ紫の上の心裡に、明石の中宮の皇子皇女達の成長を気遣う心の優しさが察知出来る。その願望も、命と共に消え去ろうとしている。本用語中の「ゆかし」という視覚的希求の心裡においても、紫の上の満たされない不安定な心情が伴っているといえる。

次の「幻」の巻においても、その語は一例のみ見当たる。それを検討する。

○春深くなりゆくままに、御前（おまへ）のありさまいにしへに変らぬを、めでたまふ方（かた）にはあらねど、静心なく何ごとにつけても胸痛う思さるれば、おほかた、この世の外（ほか）のやうに鳥の音（ね）も聞こえざらむ山の末ゆかしうのみいとどなりまさりたまふ。山吹などの心地よげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたまふ。

この巻においても、形容詞の連用形で表われる。

語義は、文意に即して考察すると、「恋しい」と意味付け、「……鳥の声も聞こえないような山の奥が恋しい気持ばかりがいよいよ強くおなりになる……」と現代語訳する事も可能かも知れないが、「ゆかし」を「行く」の未然形に「し」が付いて出来た語、という説に従って考察を加え、「行きたい」と解すると、より自然な訳が付くように思える。即ち、「……、およそ、この世とはまるで別世界のように鳥の声も聞こえないような山の奥に行きたい気持ばかりがいよいよ強くおなりになる。……」と現代語訳する事が出来、「ゆかし」の原義を生かした解釈が出来、より適切ではないかと思われる。これは、源氏が春の庭の風情を見て、紫の上の事を思い出し、痛惜の念にかられ、早く紫の上を思い出さないような山の奥に行ってしまいたいという、源氏の落ち着かない苦しい心情が察知出来る。したがって、本用語例中の「ゆかし」は感覚的欲求から離れ、

Osaka Shoin Women's University Repository

「行きたい」という行動的欲求を示している。その心裡には、苦しい落ち着かない不安定な心情を伴っている。

次に「匂宮」の巻を検討する。

○薫「宮のおはしまさむ世のかぎりは、朝夕に御目離れず御覧ぜられ、見えたてまつらんをだに」と思ひのたまへば、右大臣も、あまたものしたまふ御むすめたちを、一人一人は、と心ざしたまひながら、え言出でたまはず。さすがにゆかしげなき仲らひなるを、とは思ひなせど、この君たちをおきて、ほかにはなずらひなるべき人を求め出づべき世かは、と思しわづらふ。

この巻においては、「ゆかし」の用語例は一例のみで、形容詞の連体形で表われる。

語義は、様様考えられるが、座右の諸注釈書を見てみると、

○「……なんといっても、お互いに知りつくした間柄であるからどんなものか、とはお考えになってみるものの、この君たちを別とすれば、世間でほかには比較になる人を捜し出すことはとてもできまいと苦慮していらっしゃる。」（『日本古典文学全集　源氏物語』―小学館）

○「……それでも、当たり前すぎる縁組と思ってはみるものの、『このお二方以外には、自分の娘をやってもいいと思うような男を探し出せる今であろうか』と困っていらっしゃる。」（『源氏物語評釈』―角川書店）

○「……考えてみればあまりに近い縁者でおもしろみもないから（何も薫にこだわることもない）、とは考えてご覧になるものの。……」（『新潮日本古典集成　源氏物語』―新潮社）

○「……薫も匂宮も、内輪が知れ過ぎて、自分とはなつかしげのない間柄であるから、どうしようか（嫁がせようか、嫁がせまいか）」とまあ、さすがに……」（『日本古典文学大系　源氏物語』―岩波書店）

このように、「ゆかしげなき仲らひ」の語釈に、様様の解を見るが、一言で換言すれば、『日本古典文学全集　源氏物語』が示す「知りつくした間柄」という解になろう。今回ここでは、この語釈に従っておきたい。この「知りつくした間柄」とは、夕霧にとって薫も匂宮も縁者という関係にある。したがって、当然の事ながら、夕霧の娘とも縁者になる関係上、「知りつくした間柄」という事になる。夕霧は自分の娘の結婚相手にあれこれと心中深く悩み困るのである。

さて、今まで、数多くの「ゆかし」という語の用語例を検討してきたが、その大部分が一主体者の好奇心・欲求・希求を示す用法であったが、本用語例においては、その用法と異なりを見せ、叔父と姪との間柄に対して使われており、あまり例を見ない。『源氏物語』において、数多くの「ゆかし」の検討を進めてくると、基本から離れた第二義的な意義・用法が認められるようになる。

次に「紅梅」の巻の検討に移る。この巻では、「ゆかし」の語は

Osaka Shoin Women's University Repository

二例のみ見当たる。これ等を見ていく事にする。

○いづれも分かず親がりたまへど、御容貌（かたち）を見ばやとゆかしう思して、大納言「隠れたまふこそ心憂けれ」と恨みて、人知れず、見えたまひぬべしやとのぞき歩（あり）きたまへど、絶えてかたそばをだにえ見たてまつりたまはず。

一番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われ、「思し」という心の動きを表わす語に接続させ、思う事の内容を「ゆかし」という語で示している。

語義は、「見たく」と語釈したいが、そう考えると、この「ゆかし」の語に、同じ意味を有する「見ばや」という視覚的語彙が上接されており、同じ意味が重複し、「お顔を見たいと（強く）見たくお思いなされて」と現代語訳を試みてみたが、文意上不自然な訳になる。「見ばや」は「見たい」という意味以外には考えられないとすれば、「ゆかしう」を視覚的意味以外の、心情面からの解釈を考えて、「強く心が惹かれる（ように）」と意味付けると、「大納言は、どの御子も区別せず親らしくなさるけれども、お顔かたちを見たいと強く心が惹かれるようにお思いになって、大納言『隠れていらっしゃるのが辛いことだ』と恨んで、そっと、お見えにならないものかと覗いてまわられるけれども、全く片端さえもお見申し上げる事がおできにならない。」と現代語訳を試みてみたがいかがであろうか。これは、大納言は、実子、継子の区別なく、宮君にも親らしくなさるが、まだその容貌を見ていなかった。そこで美貌である事を聞き好色心が涌き見たい心情になる。という場面である。

さて、再び本用語例に目を向けると、「見ばやとゆかしう思して」・「見えたまひぬべしやとのぞき歩（あり）きたまへど」・「え見たてまつりたまはず」と、視覚を表わす語句を多用し、大納言の視覚好奇心が次から次へと強く働いている事が感取出来る。

次の用語例の検討に移る。

○大納言「さかし。梅の花めでたまふ君なれば、あなたのつまの紅梅いと盛りに見えしを、ただならで、折りて奉れたりしなり。移り香はげ（が）にこそ心ことなれ。晴れまじらひしたまはん女などは、さはえしめぬかな。源中納言は、かうざまに好ましうはたき匂はさで、人柄こそ世になけれ。あやしう、前（さき）の世の契りいかなりける報（むくい）にかと、ゆかしきことにこそあれ。同じ花の名なれど、梅は生ひ出でけむ根こそあはれなれ。この宮などのめでたまふ、さることぞかし」など、花によそへてもまづかけきこえたまふ。

二番目の用語例は、大納言の言葉の中に、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

語義は、「知りたい」と意味付けるのが、最も適切である。そして、「……。源中納言は、こんなふうに風流好みにたき匂わさないで、人柄が世間に又とないのだ。不思議に、前世の因縁がどんなよかった果報なのかと、知りたい事なのである。……」と現代語訳出来る。薫には自然に発する不思議な体臭があるが、これは前世の善因善果によるものであろうかと、大納言は想像を逞しくし、不可能な事ではあるが、知りたいという欲求が募る。又、これと同じく

Osaka Shoin Women's University Repository

「前の世」をあつかった描写中に「ゆかし」という語を用いて、知りたい欲求を示している個所があった。これについてはすでに、『源氏物語』における〝ゆかし〟の考察㈠」(『大阪樟蔭女子大学論集』第二五号)で述べたが、「桐壺」の巻に見られる。即ち、

○命婦「上もしかなん。『わが御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになん。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち棄てられて、心をさめむ方なきに、いとど人わろうかたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ』と、うち返しつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。

とあり、これは「前世の悪業の報い」と受け取り、それを知りたいという欲求を示し、この「紅梅」の巻では、逆に「前世の善業の報い」と受け取り、それを知りたいと思う欲求を示し、いずれも、実際に知覚に与えられていない「前の世」を、心に思い浮かべて、知る事の不可能な想像の世界を知りたいと欲求している。

以上の如く、「紅梅」の巻を検討してきたが二例共形容詞で表われ、一方は「連用形」で、その好奇心は実現可能な事へ意識が向けられているが、もう一方は「連体形」で仏教的思想である「前の世」に心が向けられ、知る事の不可能な想像の世界を知りたいと所望している。

次に「竹河」の巻を見てみると、その用語例は二例見当たる。

○内より和琴さし出でたり。かたみに譲りて手触れぬに、侍従の君して、尚侍の殿、「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひたまへると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。今宵は、なほ鶯にも誘はれたまへ」と、のたまひ出だしたれば、あまえて爪食ふべきことにもあらぬをと思ひて、をさをさ心にも入らず掻きわたしたまへるけしきいと響き多く聞こゆ。

一番目の用語例は、形容詞の連用形で、尚侍の殿(玉鬘)の言葉の中に表われる。

語義を考察すると、「ゆかし」の対象が和琴の音色を指している事から、聴覚的欲求が働いているものと思われる。したがって、「聞きたい」と意味付けるのが適切である。そして、「御簾の中から和琴を差し出した。薫も蔵人の少将もお互いに譲り合って手を触れようともしないので、玉鬘は御子息の藤侍従の君を通じて、尚侍の殿(玉鬘)、『故致仕の大臣の御爪音に似通っていらっしゃると聞いておりますが、真実お聞きしとうございます。今宵は、やはり鶯にでも誘われたつもりになって下さい』と、申し出られたので、薫は、はにかんで爪をかんでいるような事でもないからと思って、あまり気のりもせずかき鳴らしなさった音色は非常に響きもゆたかに聞こえる。」と現代語訳出来る。

尚侍の殿の父の致仕の大臣は和琴の名手であり、弾奏している場面は随所に見られる。因にその個所を示すと、

○大臣和琴ひき寄せたまひて、律の調べのなかなか今めきたるを、さる上手の、乱れて掻い弾きたまへる、いとおもしろし。

Osaka Shoin Women's University Repository

（「少女」）

○「……ただ今はこの内大臣になずらふ人なしかし。ただはかなき同じすが掻きの音に、よろづのものの音籠り通ひて、いふ方もなくこそ響きのぼれ」と語りたまへば、ほのぼの心えて、いかでと思すことなれば、いとどいぶかしくて、玉鬘「このわたりにてさりぬべき御遊びのをりなどに、聞きはべりなんや。あやしき山がつなどの中にも、まねぶものあまたはべるなることなれば、おしなべて心やすくやとこそ思ひたまへつれ。さは、すぐれたるはさまことにやはべらむ」と、ゆかしげに、切に心に入れて思ひたまへれば、（「常夏」）

○御前に琴の御琴　大臣和琴弾きたまふ。年ごろ添ひたまひにける御身の聞きなしにや、いと優にあはれに思さるれば、琴も御手をさをさ隠したまはず、いみじき音ども出づ。（「若菜上」）

等、いかにもまろやかな和琴の響きが聞こえてくるような、優雅な様子が描かれている。

　右に示した「常夏」の巻の引用文については、既に、「『源氏物語』における〃ゆかし〃の考察㈢」（『樟蔭国文学』第二十六号）で述べたが、玉鬘の父は和琴の弾き手の名手であり、玉鬘はその父の和琴の音色を聞きたいと思う、聴覚的欲求を「ゆかし」で捉えている。その心裡には美しい和琴の調べに心を向ける美意識が働いている。したがって、この「ゆかし」という聴覚的欲求には快感が伴っている。

　さて、このように、故致仕の大臣がいかに和琴の名手であったか知るところである。

　玉鬘は源侍従の弾く和琴の音色が、この名手である故致仕の大臣の弾奏する音色に、大層似ているという評判を聞いて、どんなにお上手であるか、その調べを聞いてみたいと強く切望する。玉鬘自身も和琴の調べが聞き分けられる程の技量を有していた事が感取出来る。即ち、本用語例中における「ゆかし」は、美しいまろやかな音色に対する美感覚が働き聴覚的欲求を示している。その心裡には、美しい音色へ好奇心を寄せ、快感を覚えている一方、亡き父への思慕の情が募り感傷的になっている玉鬘の心情が窺われる。

　次の用語例の検討に移る。

○尚侍の君、かくおとなしき人の親になりたまふ御年のほど思ふよりはいと若うきよげに、なほさかりの御容貌と見えたまへり。冷泉院の帝は、多くは、この御ありさまのなほゆかしう昔恋しう思し出でられければ、何につけてかはと思しめぐらして、姫君の御事を、あながちに聞こえたまふにぞありける。

二番目の用語例は「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

　語義は「心惹かれて」と文意上意味付けるのが最も適切であろうが、「会いたい」意識が多分に働いているものと思われる。そして、「尚侍の君は、こんなに成人なさった人の親になっていらっしゃるお年の程と思うわりには非常に若くきれいで、やはり女盛りのお姿とお見えである。冷泉院の帝は、主に、玉鬘の御様子に今も心惹か

Osaka Shoin Women's University Repository

れて昔の事が恋しくお思い出しになられるので、何にかこつけようかと御思案の末、姫君の 御事を いちずに 申しこみなさるのであった」と現代語訳出来る。

尚侍の君は、この時四十八歳であったが、可愛い感じの人で若く見えたのであろう。冷泉院の帝は、今もこの可愛い感じの玉鬘に心を惹かれ会いたいと所望している。

「ゆかし」の語義は文意上、心情面で捉えて「心惹かれて」と語釈したが、「会いたい」という視覚的欲求が募り複合的に働いているものと思われる。冷泉院の帝の美感覚と、恋情とを感取する事が出来る。

以上の如く、「竹河」の巻には、「ゆかし」の語は二例あり、二例共形容詞の連用形で表われている。

前者は、尚侍の殿が、和琴の名手であった父致仕の大臣の弾奏する音色に、大層よく似ていると評判であった、源侍従の美しい音色に対して、美感覚を持ち、「聞きたい」という聴覚的欲求が募り、その心中には、存命中の父を恋慕する気持ちが深く潜在している。

後者は、冷泉院が美しい玉鬘に今もなお心惹かれて、昔玉鬘が在位中尚侍として出仕していた頃の事が恋しく思い出されて、会いたいという感覚と共に、玉鬘を恋慕する情が心中深く潜在している。

さて、このように検討してみると両者共、美しいものへ心惹かれる美意識と、過去の人の面影を恋しく追い求めようとする、恋慕の情が認められ共通性を示している。

次の「橋姫」の巻では、「ゆかし」の語は五例見当たる。それ等を検討していく。

○仏の御隔てに、障子ばかりを隔ててぞおはすべかめる。すき心あらむ人は、気色ばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかがとゆかしうもある御けはひなり。

一番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

語義は、視覚が働いているように思えるので、感覚面から考察して、「見たく（もある）」と語釈を 試みてみたが、この語の近辺に「見まほしう」という視覚的意味を有する 語があり、同じ意味が重複し、文意上あまり相応しくない。むしろ、心情面から考察して、「心惹かれ（もする）」と、第二義的意味に解した方がより適切であると思われる。そして、「仏間との 御仕切には、襖ぐらいを隔てにしておいでになるらしい。好色心のあるような男なら、懸想めいた様子で言い寄って、姫のお気持ちをも見たくて、やはりどんな姫かと心惹かれもする御様子である」と現代語訳出来る。これは、まめ人の薫でさえも、姫に関心を寄せ、どんなお方か知りたいと思う心情を表わしている。即ち、姫の良い面だけでなく、悪い面も含めてどんな人か知りたく、心惹かれ会って話したり、態度や御容貌を見て知りたいという欲求が募っているものと思われる。したがって、本用語例中の「ゆかし」には、中将の不安定な心情が伴っている事が察知出来る。

次の用語例の検討に移る。

○ 薫「年ごろ、人づてにのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、うれしきをりかな、しばし、すこしたち隠れて聞くべき物

Osaka Shoin Women's University Repository

の限ありや。つきなくさし過ぎて参りよらむほど、みなことやめたまひては、いと本意なからん」とのたまふ。

二番目の用語例は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で薫の言葉の中に表われ、「思ふ」という心の動きを表わす語に接続させ、思う事の内容を「ゆかし」で表わしている。

語義を考察すると、「ゆかしく」の対象となるものが、御琴の音に関心を抱いているから、「聞きたく」と意味付けるのが適切である。そして、『(姫達がお琴を弾奏するのが、お上手だという噂を)長い間、人伝にばかり聞いて、聞きたく思う御琴の音などを、よい折だなあ、しばらく、ちょっとたち隠れて聞けるような物陰はあるか。私が不相応に出しゃばっておそばに参ったりする間に、皆、琴を弾くのをおやめになってしまっては、大層残念であるからね』とおっしゃる。」と現代語訳する事が出来る。

薫は、姫達の琴の弾奏に好奇心を向け、聴覚的意識を持ち続けているため、自らの一言の中に、「人づてにのみ聞きて」・「ゆかしく思ふ」・「聞くべき物の限ありや」と聴覚用語を三語も用いているのは注意を引く。

薫は、物陰に隠れて、ころころとまろび出てくるような、低く・丸く・太く・柔らかい琴の音色を聞きたく所望している心情が察知出来る。今まで、噂にばかり聞いていた事を実際に快く聞いてみたい、きっと共鳴出来るだろうと美意識を働かせ、今、それを体験でもって知りたく思っているのである。

即ち、薫の聴覚的欲求の心裡には、美的心情が潜在している。結局、本用語例中の「ゆかし」には快感が伴っている事が感取出来る。

次の用語例を検討していく。

○はてはては、まめだちていとねたく、おぼろけの人に心移るまじき人のかく深く思へるを、おろかならじとゆかしう思すこと限りなくなりたまひぬ。

三番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われ、「思す」という心の動きを表わす語に接続させ、思う事の内容を示している。

語義は、「見たい」と意味付けるのが適切である。そして、「しまいには、匂宮は、本心からとてもいまいましく、『並みたいていの女には心の移りそうもない人(薫)が、こうも深く思っているのを、いい加減な人(女)ではあるまい』と姫君たちを見たいとお思いになる事がこの上なく募っていかれた。」と現代語訳出来る。これは、まじめ男である薫さえ姫君たちに関心をよせる程であるから、さぞ極だった美質の備わった姫君であろうと、匂宮は想像すると、見たい気持ちが募るという場面である。

匂宮の視覚的欲求の心裡には、美的心情が潜在している。即ち、本用語例中の「ゆかし」には快感が伴っているものと思われる。

次の用語例を検討する。

○「げに、よその人の上と聞かむだにあはれなるべき古事どもを、まして年ごろおぼつかなくゆかしう、いかなりけんことのはじめにかと、仏にもこのことをさだかに知らせたまへ、と念

Osaka Shoin Women's University Repository

じつる験にや、かく夢のやうにあはれなる昔語をおぼえぬついでに聞きつけつらむ」と思すに、涙とどめがたかりけり。

四番目の用語例は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

語義は、諸注釈書を見ると、「知りたく」と訳されているが、この場合、聞きたい意識が強く働いているものと思われる。したがって、「聞きたく」と意味付けても何ら差し支えがないように思われる。そして、『なるほど、他人の身の上として聞いてさえ、しみじみと悲しくなるにちがいない昔話などを、まして長年の間気にかかって聞きたく、いったい事の起こりは何であったのかと、仏にもこの事をはっきりお知らせ下さい、と祈った験であろうか、こうして夢のように心うたれる昔話を思いがけない機会に聞きつけたのであろう』と薫がお思いになると、涙を止める事が出来ないのであった。」と現代語訳出来る。

薫が「長年の間気にかかって聞きたい事」とは、自分自身の出生に対して懐疑の念を抱いており、その秘密を聞いて知りたいという事を指している。薫のこの一言中に、「よその人の上と聞かむだに」・「年ごろおぼつかなくゆかしう」・「おぼえぬ ついでに聞きつけつらむ」と、聴覚用語を多用し、聴覚意識の昂揚をみせている。薫の「ゆかし」という欲求の対象は、主体者本人の過去にすでに起った出生の秘密を、自分の知力でもって認識を得る事を可能にしようと努力している。「聞きたい」・「知りたい」感覚が強く募る一方、その心裡には動揺が治まらぬ心的状態が察知出来る。したがって、本用語例中の「ゆかし」には、不安定な心情が伴う事がいえる。

では、「橋姫」の巻の最後の用語例を検討しよう。

○さては、かの御手にて、病は重く限りになりにたるに、またほのかにも聞こえむこと難くなりぬるを、ゆかしう思ふことはそひにたり、御かたちも変りておはしますらむが、さまざま悲しきことを、陸奥国紙五六枚に、つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて、

これは、「橋姫」の巻の終結部で、五番目の用語例に当たる。「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われ、「思ふ」という心の動きを表わす語に接続させ、思う事の内容を「ゆかしう」という感覚で示している。

語義は文意から勘案して、「お会いしたく」と意味付けるのが適切である。そして、「そのほかには、あの方（柏木）の御筆跡で、私の病気は重く最期となってしまったので、再びほんの短いお便りをさし上げる事は難しくなったが、お会いしたく思う事は募るばかりだし、御姿も尼姿にお変りになっていらっしゃろうが、あれこれと悲しいという事を、陸奥国紙五、六枚に、ぽつりぽつりと奇妙な鳥の足跡のように書いて、」と現代語訳出来る。

これは、薫が柏木の遺書を読む辺りの叙述描写であるが、臨終の時期が近いと感じた柏木は、かって執着した女三宮に再び会いたく思う視覚意識が募るばかりである。柏木にとって女三宮は、過去において逢瀬を重ね恋に陶酔した事のある女である。その女三宮に、死を直前に予感した今、内心女三宮の面影が彷彿と目に浮かび、思慕の情がこみあげ、最期に一目会いたいそして話したいという欲求

Osaka Shoin Women's University Repository

が昂揚する。その柏木の心裡には、寂寥の念と追懐の情を察知する事が出来る。

結局、本用語例中における「ゆかし」という感覚においても、不安定感を伴っているものと思われる。

以上、「橋姫」の巻の五例を検討吟味してきたが、五例共、形容詞の連用形である。その内、二番目・三番目・五番目においては、「ゆかし」に「思ふ」・「思す」という心の動きを表わす語を下接させ、思う事の内容を「ゆかし」で示し、その意識を高めている。

「ゆかし」という欲求の主体者をまとめると、五例共男性であり、その対象は四番目を除いて、すべて女性や女性が弾奏する琴の音に好奇心が向けられている。又、感覚においては視覚・聴覚が働く場合が多く見られるが、その心裡には、不安定感や快感等の心の動きが伴う事が分かる。

本稿においては、「柏木」の巻から「橋姫」の巻までを検討吟味してきた。

（続）